

アイヌの伝統が残る文化的景観指定区域内での居住地と水害との関係  
ー平取町貫気別地域を対象としてー

21919046 和田 未穂  
指導教員 葉袋 奈美子 教授

集落 居住根拠 コタン  
地形断面 標高比較

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

伝統的な集落では、災害対策に関する知恵が生かされているものがある。しかし、現代ではその知恵を無視し、造成・開発をした結果、災害の被害に遭うという事例が多く見られる。我々はもっと先人たちの暮らしの様子や知恵を学び、現代にも生かしていくべきではないか。

集落形態に知恵がある1つとして、アイヌ民族は水害に遭わないような高台に集落を形成していたと言われている例(葉袋<sup>1</sup> 2019)がある。アイヌ集落の居住根拠を考察した既往研究(高倉<sup>2</sup> 1939; 渡辺<sup>3</sup> 1964ほか)はあるが、そこに水害との関連性があるかという事について研究したものは少ない。そこで本研究では、アイヌの居住形態と水害の関連性を考察し、現代の居住形態と比較することで、集落での災害への対応のヒントを探ることを目的とする。

1-2. 研究方法

アイヌと現代の居住形態を災害への対応について比較するために、アイヌの集落(コタン)が残るか平成15年に河川による浸水被害があった、北海道沙流郡平取町貫気別地域を調査対象とする。アイヌの居住地と平成15年の浸水被害に遭った居住地のそれぞれの標高比較を軸として、地名からの推測、文化と産業の移り変わりにより、それぞれの時代で何を根拠に居住地を選び、そこに水害への対応は含まれていたのかについて検討する。調査は、

H15 水害に関する住民へのヒアリング調査及び文献調査、並びに地形断面図の作成からの考察により行った。

2. 平成15年水害の被害実態と水害に対する認識

平成15年の台風10号が発生した際、北海道全域で大雨が降り、特に日高地方では大きな被害を受けた。短時間の大量の雨で、土砂崩壊による土砂と流木が各地で発生し、護岸の浸食や橋梁の崩壊による大きな洪水被害が発生した。貫気別川付近の観測所ではそれまでの最高降水記録を更新し、貫気別地域では13世帯28人が避難した。小学校や貫気別のアイヌ集落(以下貫気別コタン)がある場所は浸水被害に遭っておらず、額平川と貫気別川が合流する地点の低地で浸水被害があった。

人的被害は免れたが浸水などの住宅被害はあり、貫気別地域の住民へのヒアリング調査によると、床上浸水や流失した住宅もあったが、近所で声を掛け合ったため、川の様子を見て貫気別生活館に避難し全員無事だった。

水害後、川の様子や天気予報をきちんと見るようになったり、自然を侮ってはいけないという感覚を得たりしたという。まずは水害に遭うというその土地の特性を知り、非常時にはその知識を生かして対応する事が重要だ。

3. アイヌ集落と現在の市街地の比較

3-1. アイヌ集落と平成15年浸水被害域の場所

貫気別コタンは現在も集落として残り、図1に示す場所にある。貫気別郷土誌<sup>4</sup>によると、昔のコタンは現在のコタンの600m下手にあった可能性があり、黒川セツさんの

伝承<sup>5</sup>では、昔はフシココタンがあったという。明治29年の地図(図1)を見ると、フシココタンは貫気別コタンの600m下手にあり、2つの文献で述べられているコタンは一致すると考えられる。両コタンの近くにはイペペシナイ(アイヌ語で「魚がごちゃごちゃしている川」という意味)(図1のA)があり、アイヌは狩猟の他に川で漁猟をしていたので、食糧

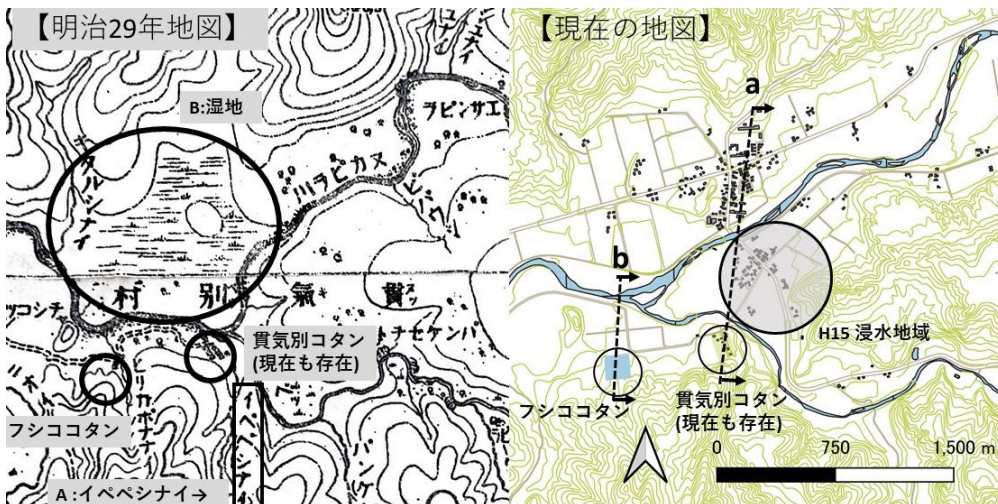


図1 明治29年と現在の貫気別地域 左:明治29年旧版地図<sup>6</sup>に加工、右:国土地理院 基盤地図情報<sup>7</sup>を用いQGISにより作成

確保の点で好立地である。

また、フシココタンの対岸には湿地(図 1 の B)があるため、魚や建材に使用する植物などの資源獲得には好条件であり、両コタンは生活資源の獲得に適した場所に立地していたことが分かる。現在の市街地は、H15 年に浸水被害にあった低地とその向かいの額平川を越えた場所に広がっている。貫気別地域には明治 25 年に初めて入植者が入り、牧畜や農業などの産業により発展した。現在の市街地の居住根拠については、正確な情報が得られていないが、日高開発史<sup>8</sup>の内容より入植者が開墾のために農業に適した肥沃な土地を選択したと予想する。本町の方から物資を運ぶためには高台ではなく低地の方が便利という理由も考えられ、貫気別の産業の発展のためには低地に市街地が形成される必要があったと考える。

### 3-2.アイヌ集落と市街地の標高比較と居住根拠

市街地、浸水地域、貫気別コタンの地形断面図を作成すると、図 2 の a のようになる。貫気別コタンは浸水地域と比べて 10m 以上高く、水害に遭う可能性の低い場所に立地していることが読み取れる。次に額平川、フシココタンの地形断面図を作成すると図 2 の b のようになる。フシココタンは額平川と比較して 6m ほど高い場所に位置しているため、被害に遭う可能性は低いと言える。平成 15 年の水害でも被害には遭っていない。両者とも川から 2 段高い河岸段丘上に立地しているが、これは渡辺<sup>3</sup>(1964)の主張するコタンの立地場所を裏付ける結果となった。

以上より、アイヌは生活資源が確保でき、浸水被害を避けて場所を選択して集落を形成していたと言える。川に対する認知度が高かったアイヌの時代は、浸水被害に遭いにくい段丘上に集落を形成していたが、産業や文化の発展に伴って集落形成時の場所選択における優先事項が変化した結果、水害被害に遭いやすい場所に市街地が

形成されたことが予想される。

### 4.文化的景観の形成における水害の位置づけの提案

平取町は縄文時代以前に形成された自然景観、アイヌ文化、開拓期の産業の要素などが重なり、独自の重層的な文化がある地域だ。景観においてはアイヌ文化を基層とする多文化性を包含している<sup>9</sup>として、沙流川流域の景観を評価し失われた要素を復元しようと申し出を行い、2007 年に文化財保護法に基づく「重要文化的景観」に選定された。地域振興に役立たせ、世界的価値のある多文化な生活空間の発展を目指し、現在は山林やアイヌの伝承地などを要素に含む 7 つの区域が選定されている。

本稿の調査対象区域は選定されておらず、アイヌの伝統的集落を含む指定区域はあるが、水害との関係には触れられていない。そこで、「水害と標高の関係」という要素を含めアイヌ集落立地場所の選定申出を提案する。第 3 章ではアイヌが浸水被害の少ない場所に居住していたことが明らかになったが、アイヌ文化を後世に伝えるとともに、浸水被害を受ける可能性のある地形特徴を意識することで現代の水害対策に繋がる。またヒアリング調査では、災害を経て住民が水害に対する危機意識を改めたことが明らかになり、この意識を後世に継承するためにも、本研究で得られたアイヌ集落立地場所と水害との関係をもとに、提案を実現する余地があるのではないかと。

【参考文献】(1)葉袋奈美子,岡井有佳:北海道奥尻島における津波と居住の歴史,歴史都市防災論文,Vol13, p155-162, 2019. (2)高倉新一郎:アイヌ部落の変遷, 1939. (3)渡辺仁:アイヌの生態と本邦先史学の問題, 日本人類学会 72 巻 1 号 p. 9-23, 1964. (4)貫気別郷土誌編集委員会編:郷土誌貫気別, 2005 年 3 月 31 日. (5)貝澤太一:〈調査報告〉黒川セツさんの伝承 1:アペクンチとペクンチの伝承, 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, 第 9 号 p147-157, 2003 年 3 月 25 日. (6)国土地理院:明治 29 年製版 5 万分の 1 旧版地図. (7)国土地理院:基盤地図情報ダウンロードサービス, 2023 年 1 月 11 日閲覧. (8)橋文七編:日高開発史, 北海道日高支庁, 1954 年. (9)北海道平取町平取町文化的景観保存計画書三次選定申出版, 2018 年 1 月 26 日.

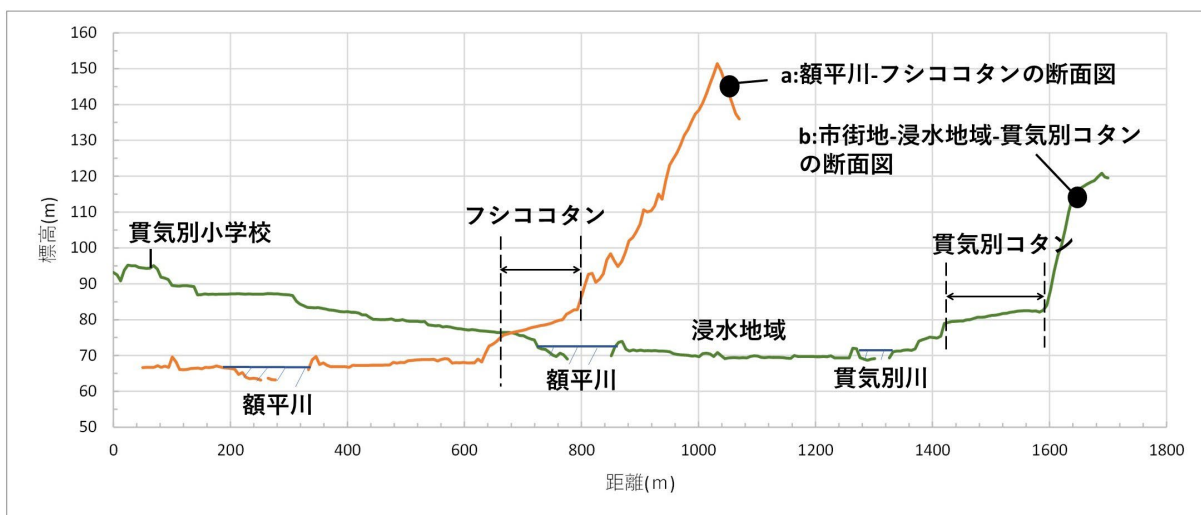


図 2 両コタン周辺の地形断面図